

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：34303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01184

研究課題名(和文) 低植生環境における村の生存維持に関する研究：近世～近代の琵琶湖地域を事例として

研究課題名(英文) A Study on the Maintaining Community Livelihoods in a Low-vegetation Environment: A Case Study of the Lake Biwa Region in the Early-modern to Modern Times.

研究代表者

渡部 圭一 (WATANABE, Keiichi)

京都先端科学大学・人文学部・准教授

研究者番号：80454081

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：前近代日本の山林について、近年では荒廃した低植生のイメージが提示されるようになったが、フィールドワークに基づく研究成果はまだ乏しい状況にある。本研究では、低植生の地域の実態の解明を目的とする。

方法として、対照的な植生環境にある湖西・湖東の村(大津市北比良、近江八幡市南津田)、および沖島(近江八幡市沖島町)を例に、植生の利用・管理史を比較した。その結果、本研究では資源の枯渇や過剰利用の問題を、いわゆる「里山」の一形態として位置付けた。柴山やはげ山はいわゆる「持続的な利用」とは異なるものであるが、それはけっして地域的に特殊で例外的な事例ではないことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、いわゆる里山における植生利用が「持続的な利用」とは異なる形態の不安定なものであったこと、同時にそれは地域的に特殊で例外的な事例ではないことを明らかにした。一般に里山といえば、日本の自然環境の原風景を示すものとして牧歌的に受け止められやすいが、その現実には過剰利用によって荒廃した山林で構成されていたという事実は一定の社会的意義を有する知見であると考えられる。さらに石材採取にともなう低植生の問題、山地の荒廃にともなう災害のリスクに対応する在来知の生成など、新規の研究課題が数多く見出された意義も小さくないと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In recent years, an image of degraded low vegetation has been presented in pre-modern Japanese forests, but there have been few research results based on fieldwork. The purpose of this research is to elucidate the actual conditions of areas with low vegetation. As a method, we selected two villages from Kosei (Kitahira, Otsu City) and Koto region (Minamitsuda, Omihachiman City), and Okishima island (Okishima-cho, Omihachiman City), which have contrasting vegetation environments, and compared the history of vegetation use and management in these villages. As a result, we positioned the problem of resource depletion and overuse as a form of so-called "satoyama" in pre-modern and modern Japan. Although the forms of utilization of shibayama (mountain for collecting firewood) and hageyama (treeless mountain) are not sustainable, it has become clear that they are not regionally unique and exceptional cases.

研究分野：環境民俗学

キーワード：低植生環境 資源管理 植生 柴山 はげ山

1. 研究開始当初の背景

前近代日本の山林の植生について、近年の研究では両極端のイメージが提示されている。ひとつは青々とした針葉樹林のイメージであり、もうひとつは荒れ果てた草山やはげ山のイメージである。

前者は林業史分野における伝統的な林業地帯に関する研究である。これによると近世中～後期にはスギなど針葉樹の植林(育成林業)が発達し、用材として都市の市場に出荷する構造が形成されたという。大坂市場に大量の樽板材を供給した吉野林業(奈良県吉野郡地方)の隆盛は、その典型とされる[西川善介 1960、谷弥兵衛 2008 など]

一方で、近年の近世史や歴史地理学では草山やはげ山など荒れた山林に関する研究が活発化している[小椋純一 1992、水本邦彦 2003]これによると近世前期～後期の淀川流域、京都郊外、琵琶湖周辺など近畿地方の各地では、村の山の多くは柴山(低木の広葉樹とアカマツが生える程度の荒れた山)や草山、ときにははげ山の状態であったとされる。

これまで近世の育成林業は、日本の森林を維持・回復させた原動力として評価され[コンラッド・タットマン 1998]とくに英語圏の環境史研究では定説の地位を得てきた。これに対して「全国の間々は(略)劣化した森林で覆われていた」[太田猛彦 2012、42 ページ]と言い切る論者も現れるなど、日本の山林の実態は大幅な見直しを迫られている。

2. 研究の目的

(1) 木材は前近代においてほぼ唯一のエネルギー資源であり、その枯渇は村の生存を脅かす問題である。したがって植生の格差は、単に森林被覆率の問題だけでなく、「植生がない(乏しい)」ことが人々の暮らしにどのように影響を与えたかという生活史の問題として考察すべきであるが、いまだ具体的な研究はないのが現状である。

この原因として、日本の村の資源管理を扱ってきた民俗学、歴史学、社会学などの諸分野では、「資源がある」状況を暗黙の前提としてきたことが指摘できる(たとえば従来の村落構造のモデルでは、山林の存在は所与のものとして組み込まれている)。結果として、山林所有をめぐる地域や階層ごとの格差は捨象され、村による資源管理の仕組みを自足的かつ持続的なものとみなしてきた傾向がある。

こうした研究状況をふまえ、本研究では、豊かな森林資源に囲まれた村というイメージを転換し、低植生～無植生状態という過酷な状況におかれた人々がどのように生存を維持したかという、これまでにない生活史レベルの問題に取り組むことを目的とする。

(2) 具体的な課題は以下のとおりである。まず資源枯渇状況の地域社会の生活・生存維持のありかたを、特定地域のフィールドワークによって構造的に分析する。まず植生の劣化をみる際の指標として広葉樹林とその産物に注目する。民俗語彙でゾウキ・ゾウボク・ザツボクなどとよばれる「雑木」植生がこれに相当し、樹種としては主にクヌギ・コナラなどの落葉広葉樹を指す。

「雑木」とは、薪材や炊き付け材、炭材、肥料、建築・生活資材となるなど、村の暮らしにとって最も基礎的なエネルギー資源である。また荒廃状態の山々からも一定量が供給されること、利用条件しだいで草山や柴山と相互に転換することなど、植生の資源量の変動と人々の暮らしの変化の応答関係を読み取るための指標として有効である。

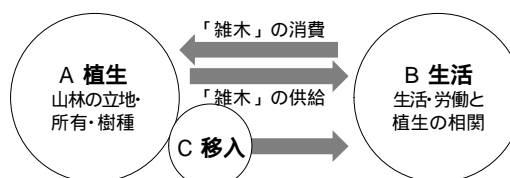
さらに調査対象として近江国の琵琶湖周辺地域を選定する。この地域の森林資源量は、山地の多い琵琶湖西岸(湖西・湖北)に多く、平場農村地帯の東岸(湖南・湖東)に乏しいという、西高東低の分布を呈する。東岸一帯は近世には草山・はげ山も増加するなど[千葉徳爾 1991 など]、植生の格差が及ぼす影響を構造的に理解するのに最適なフィールドである。

(3) 以上の議論をふまえ、本研究では下記の点を明らかにすることをめざす。

(A) 「雑木」供給の拠点となる村の植生の実態の解明(植生の問題)

(B) 「雑木」の不足や枯渇が村の生活に与えた影響(生活・消費の問題)

(C) 不足する「雑木」を補う仕組み(外部からの資源移入の問題)



低植生下における村の生活史研究のデザイン

3. 研究の方法

具体的な調査地域として、対照的な植生環境にある湖西・湖東の各1か村(大津市北比良、近江八幡市南津田)および琵琶湖内に位置する有人島である沖島(近江八幡市沖島町)を例に、植生の利用・管理史を比較する。とくに資源量の差が明確に表れる労働慣行として、「はさ」の脚材や(杭のみ/竹・杭併用/竹のみ)、調理・暖房・風呂焚きの燃料の地域格差(柴・薪のみ/稲藁併用/稲藁のみ)を分析する。手法として、戦前期に関する聞き取り調査と近世～近代文書の調査を行い、近世～現代の歴史民俗誌を作成する。

申請者の調査では、近世の南津田村では村の共有山がはげ山・柴山化し、私有の藪でわずかな

燃料・資材を調達していた。日用の燃料は稲藁のみで、正月と葬式以外では薪を使わないというほど極端な消費制限が行われていた。このような低植生下で村が生存・生活を維持する最低限の木材資源量を定量的に明らかにする。また複数村の定点調査により、植生保全のための規約や罰則、造林活動、木材の「儉約」や儀礼的消費など、慢性的な資源不足の影響下で形成された、特徴ある生活・労働の習俗と植生環境との相関を分析する。

さらに昭和初期まで湖上の物資移送に活躍した荷船（丸子船）の積荷として、薪、柴、杭、炭など大量の燃料・資材類が知られる〔橋本鉄男 1984〕。これら資源の動きに関する民俗誌情報を収集し、燃料資源の移動方向を把握する。これらにより、琵琶湖の東岸と西岸の植生の地域格差を背景とした、商品としての燃料の移出・移入のネットワークを復元することで、上述の知見を補強する。

4. 研究成果

(1) 2018年度は、近江湖東の近江国蒲生郡南津田村（近江八幡市南津田町）の現地における聞き取り調査、現地に保管されていた共有文書の調査（クリーニング、整理、撮影、および目録の作成）さらに県外の国文学研究史料館の所蔵する南津田村文書の撮影・分析を重点的に実施した（なお南津田の共有文書は最終的に1460点からなるものであることが判明し、最終年度である2022年度に『近江南津田共有文書目録』として目録とその解題、一部文書の翻刻を公開した）。

南津田では柴山とよばれる共有山において近世～明治中期ころまで広範なはげ山が形成されており、その利用も限定的で、わずかな柴を自給するほかは外部からの移入（割り木のすべてと柴の大部分）に頼り、これに代えて稲藁を代替燃料とする生活スタイルが確立していた。慢性的に不足する植生環境下で形作られた独特の生活・労働の様相が明らかになった。

つぎに近江湖西の調査として、1000メートル級の山林を擁する比良山麓地域のなかで近江国滋賀郡北比良村（大津市北比良）を対象とし、資源管理に関わる聞き取りと石工職人の生産用具の調査にも着手した。

(2) 2019年度は、調査の重点を比良山麓の北比良に移し、現地に保管されている北比良共有文書の調査を大津市歴史博物館・総合地球環境学研究所と合同で実施した。近世～近代の絵図が多数残されていることから、これらについては全点の撮影を行った。さらに現地の石工職人に対する集中的な聞き取り調査を並行して行った。並行して、南津田の調査を補足しつつ、所属機関である滋賀県立琵琶湖博物館で進めている展示リニューアル事業における展示制作をかねて、より手厚い植生景観の変遷を明らかにした。

これらの成果として、湖東・湖西とも基本的な植生は低層の広葉樹と一部アカマツの高木で構成される「柴山」であったこと、それぞれに植生のほとんどない「はげ山」が現出していたこと、湖西側からは多量の燃料資源が湖上輸送によって湖東側に共有されていたことなどが明確になってきた。

(3) 2020年度には、所属機関である滋賀県立琵琶湖博物館の歴史展示室（B展示室）のリニューアル事業を、本研究課題の成果の発信のひとつの媒体と位置づけ、最新の研究成果を複数の展示によって表現することをめざした。具体的には、中～近世における森林植生の変貌をとりあげた「森をひらく」コーナー、および内湖沿岸の定住と開発をとりあげた「水辺にいきる」コーナーにおいて、それぞれ大津市北比良と近江八幡市南津田町をモデルとした大型ジオラマとその解説をするデジタルコンテンツ・展示グラフィックパネルを公開することができた。これらは生業と自然に関する民俗誌のひとつの試みと位置付けることができるものである。

さらに展示の基礎資料となった比良山麓の山林利用に関連して、大津市北比良の石工・山仕事用具、大津市南小松の石工用具などを博物館の民俗資料として新規に受け入れた。石工用具は総点数1000点をこえ、生産工程の全般に対応した体系的なコレクションとなり、今後の研究発信が期待される素材となった（同コレクションは2022年3月に「北比良の石屋用具」1112点として滋賀県指定有形民俗文化財に指定された。また用具全点のデータベース公開も完了した）。

一方で2020年度は感染症拡大対策に関連して調査の進捗は十分ではなく、大学院生等による作業補助を予定していたデータ整理等や学会発表等を延期せざるをえない問題も生じた。このため研究期間の延長を余儀なくされた。

(4) 2021年度は、主として北比良の調査を継続し、石工職人の話者宅において2021年4月に新規に見出した文書についてクリーニングと撮影を実施し、明治～大正期の約500点の文書目録の作成を完了した（当該文書に関しては後継の研究課題において文書目録・翻刻の公表を進めている）。これにより当該家が所蔵する山仕事用具・文書と聞き取りによる重点的な考察を進めることが可能となった。

これらの調査の結果として、北比良では明治～戦前期における石屋の活動にともなう自治会との契約書が多数見出され、採石による山地の荒廃、土砂の河川への流出、およびこれに対する職人自身による土砂留の取り組みなどがあったことが明らかになった。これらは県費による砂防が実施される以前から、むら社会と職人集団によって自治的な砂防が行われていたことを示唆する重要な事実である。

一方、2021年度は研究対象地域である滋賀県に初の緊急事態宣言が発出され、2020年度よりも厳しい状況に直面することになった。このため研究期間の再延長を余儀なくされた。

なお2021年度には、当初より研究対象地域として予定していた滋賀県近江八幡市沖島町にお

いても、緊急事態宣言の解除後に、聞き取り調査および文書調査（沖島漁業協同組合保管文書および沖島コミュニティセンター保管文書）に本格的に着手することができた。

（5） 2022年度は、北比良と沖島における現地調査を継続した。沖島では、2022年度には感染症対策の状況が大きく改善したことを受け、定期的な文書調査（沖島漁業協同組合保管文書および沖島コミュニティセンター保管文書）および聞き取り調査を実施した。沖島漁業協同組合保管文書の概要調査は完了し、近現代文書の全容が判明するに至った（当該文書に関しては後継の研究課題において文書目録・翻刻の公表を進めている）。なかでも大正年間に現地の漁民が主体となって採石業が活発に行われたことは、島内の植生変化の契機として注目される。

（6） 本研究課題による研究成果の特色は主につぎのとおりである。

第一に、自然条件を異にする3地点における重点的なフィールドワークを行い、聞き取り、民具整理、文書調査を組み合わせた歴史民俗学的調査を実践したことで、とくに新規の文書を数多く見出し、その基礎的な整理から研究発信までを研究期間内に完遂することができたことで、共有地の植生やその利用・管理の過去のありかたが、聞き取りのみで復元される比較的最近のそれとは大幅に異なることを如実に示すことが可能になった。

第二に、山仕事に関する有形民俗文化財の整理とデータベース化、常設展示における研究成果の発信など、地域博物館を拠点とした研究成果の蓄積を行い、その社会的発信にも寄与しえたことである。とくに民具データベース、ジオラマ展示やそのデジタルコンテンツは、記述による民俗誌の限界を補う手法として重要な意味を持つものと考えられる。

第三に、研究の目的に掲げていた、低植生環境に生きる人々の具体的な生存維持の様相を具体化し、これまで十分に明確にされてこなかった資源の枯渇や過剰利用の問題を、いわゆる「里山」の環境史のなかに位置付けたことである。柴山・はげ山の環境下での燃料採取・消費のありかたは、いわゆる「持続的な利用」とはまったく異なるものであるが、それはけっして地域的に特殊で例外的な事例ではない。これらの知見は、調和的な「里山」像を歴史的にあてはめることが誤りであることを明瞭に示している。さらに石材採取にともなう低植生の問題、山地の荒廃にともなう災害のリスクに対応する在来知の生成など、新規の研究課題が数多く見出された意義も小さくないと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 渡部圭一	4. 巻 54 (9)
2. 論文標題 近代琵琶湖の豎筥 前編	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 民具マンスリー	6. 最初と最後の頁 17~22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一	4. 巻 第13輯
2. 論文標題 旧津田内湖の柴漬け漁	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 淡海文化財論叢	6. 最初と最後の頁 210~215
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一	4. 巻 第3号
2. 論文標題 博物館のある街 滋賀県草津市 滋賀県立琵琶湖博物館 ほんものの琵琶湖 (フィールド) へ出かけよう	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Rekihaku	6. 最初と最後の頁 98~101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一	4. 巻 第45巻第11号
2. 論文標題 沖島漁師、かごを編む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊みんなく	6. 最初と最後の頁 16~17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一	4. 巻 13
2. 論文標題 「はげ山」研究の新しい論点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代民俗学研究	6. 最初と最後の頁 78-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一	4. 巻 2021年3月19日号
2. 論文標題 人と自然の関係像の新たなデザイン 書評 野本寛一著『採集民俗論』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 週刊読書人	6. 最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一	4. 巻 vol.136
2. 論文標題 柴 (新撰淡海木間攪其の八十一)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Duet	6. 最初と最後の頁 9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一	4. 巻 2020年11月28日付
2. 論文標題 近江の森をひらいた人びと (湖岸より 386)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中日新聞	6. 最初と最後の頁 該当なし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤衛拡・羽賀和樹・渡部圭一	4. 巻 54
2. 論文標題 近代移行期における山村の開発と由緒 秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 徳川林政史研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 143-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一・三樹友梨香	4. 巻 なし
2. 論文標題 比良山麓の「石屋」用具調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域の歴史から学ぶ災害対応 比良山麓の伝統知・地域知	6. 最初と最後の頁 38-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一	4. 巻 11
2. 論文標題 旧津田内湖のアンコえり漁	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 淡海文化財論叢	6. 最初と最後の頁 249-254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一	4. 巻 10月3日
2. 論文標題 おうみ漁具図鑑39 船名板 比良の産物 湖東へ運び	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都新聞	6. 最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一・芳賀和樹・福田 恵・湯澤規子・加藤衛拓	4. 巻 34
2. 論文標題 明治中～後期山村の生業と地域ネットワーク 旧秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 筑波大学農林社会経済研究	6. 最初と最後の頁 1-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15068/00154857	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 渡部圭一
2. 発表標題 琵琶湖内湖における複合生業の形成 - 近代の漁業組合文書にみる釜の普及過程を例に
3. 学会等名 日本民俗学会第73回年会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡部圭一
2. 発表標題 石工の採石労働にみる山の環境と資源管理：近江国滋賀郡北比良村を事例に
3. 学会等名 日本民俗学会第71回年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡部圭一
2. 発表標題 「はげ山」と村の資源管理 近江国南津田村の共有山を事例に
3. 学会等名 日本民俗学会第70回年会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------